

2006年12月17日 待降節第3主日礼拝

『初めに言があった』

(創世記1章1~5、ヨハネによる福音書1章1~5)

2006年のアドベントも三週目となりました。旧約聖書に記されたメシア救い主のお生まれをユダヤの人びとは、心待ちにしておりました。ご存じのようにイエスさまは、二千年前、ユダヤのベツレヘムでお生まれになりました。生まれたばかりのイエスさまは、飼い葉桶の中で布にくるまれて寝かされていました。これが、人となられたイエスさまの誕生、初めてのクリスマスです。

二千年と聞いただけでもわたしたちは、気が遠くなるほど昔の事だと思います。しかし、ヨハネは、更にわたしたちを驚かせる事を書いています。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」これが、ヨハネ福音書の書き出しの言葉です。「言」とはイエス・キリストの事です。ヨハネは、この創世記の天地創造の物語をはっきりと意識して福音書を書いたと言われています。

「初めに」In the beginning は、天と地が造られるよりも前、時が流れ始めるよりもっと前のことです。「初めに言があった」。世界の天地万物の始まり。それが、どれくらい昔のことなのか、わたしたちにはいまだに、知ることはできません。この万物の始まりよりも先に神がおられた。創世記1章3に「神は言われた。『光あれ。』こうして光があった。神は光を見て良しとされた」。これが世界の出発です。神の言が語られた時、この世界は始まった。それが天地創造の由来です。

「言は神と共にあった」。世界が創られる前に神と共におられた「言」これがイエスさまです。創世記1章2節「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」。天地創造の始まりに、神と共に神の霊がおられます。神が、人格的な交わりも持った方であるとわかります。この世界のありとあらゆる交わりの根源はここに神とキリストと聖霊の交わりににあるのです。「わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです」(ヨハネ1章3)。人は、何故交わりを求めるのか。それは、神が人をそのように造られたからです。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」(創世記2章18)。神は、人間が神と似たものとして人格的な交わりを持って生きるように造られたからです。父なる神とイエス・キリストが一つであるように人と人も互いに愛し合い助け合って神を讃えて生きるように造られたのです。2節「この言は、初めに神と共にあった」。

「万物は言葉によってなった。成ったもので言によらずに成ったものは何一つなかった」。神は、世界の全てを、イエス・キリストを通して造られた。(神が)造られたものでイエスに関わりなく存在するものは何一つありません。世界のあらゆるものは、父なる神と御子なる神によって存在するようになった。今もこの世は、御父と御子によって守られ保たれているのです。たとえ、この世がそれを認めなくても実際に世界を造られたのは神

です。この世界を保っている方も神なのです。

わたしたちの命について驚くような事を示しています。このように言っています。「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった」。イエス・キリストの内に、わたしたちの命がある。それがわたしたちの光だということです。わたしたちは、何時もこう考えているのではないのでしょうか。命は、わたしたち自身のもの。自分の命は自分で守るものであると。命は、何ものにもかえられないもの大切なものです。

何日か前にニュースで、この年を現わす言として「命」という言葉が掲げられました。この背景には、人の命が簡単に奪われてしまう。そのような世相があると思います。命の大切さをもう一度見直して欲しい。こうした願いが込められているように思えます。悲しいことですが、実際この世の中で、命ほど軽く見られているものはないのではないのでしょうか。親が子どもを虐待して命を奪った。反対に、子どもが親の命を奪ったという事件も起こります。こうしたような事件が、次から次ぎに報じられています。学校の中でもいじめを苦にして若い命を絶ってしまう、こうした子ども達が後を絶ちません。いじめは、格好悪いとか、いじめはいけないと言うのは誰でも言えます。しかし、いじめは一向になくならない。子どもたちだけでなく、大人たちの中でもいじめというものはいろいろな仕方で行なわれているのです。大人が悪い見本を示すから子どもにも影響があるのかもしれない。

昔も今も世界のどこかで、戦闘や紛争が起きています。人間が、戦いのために新しい兵器の開発に熱心です。そのために多くの人の命が一時に奪われていきます。戦争は、生き残った人びとに対して、厳しい現実を背負わせます。体と心に傷を負わせ、家族も奪われ、家や仕事や生活の場も奪っていきます。それがわかっているのに、人は戦争を止めない。戦のための兵器等を造るのをやめようとはしません。科学や技術の開発は、真っ先に兵器を造るために応用されていく事が多いです。命を守るよりも、命を奪うことにわたしたちは熱心なのではないのでしょうか。命を大切にできない。そうした意味で、この世では光よりも暗闇の方が強いのではないかと思えます。そんなわたしたちに対して、聖書の御言葉は言うのです「光は暗闇の中に輝いている」と。

命を大切にできない闇のような世界に、イエス・キリストが来てくださった。これがクリスマスの意義です。暗闇は、わたしたちの罪です。わたしたち自身、罪の世界に慣れきっている闇の申し子です。イエスさまは、そのようなわたしたちの事をこう言われています。「光が世に来たのに人々はその行いが悪いので光よりも闇の方を好んだ」(ヨハネ 3 章 19) と。イエスさまが言われたように、この世に属するわたしたちは、イエス・キリストを理解しなかったのです。イエスさまが、僅か五つのパンで 5 千人を養ったことがあります。この奇跡の後、更なる奇跡を求める人々にイエスさまはこう言われました。「神のパンは、天からくだってきて世に命を与えるものである。」(ヨハネ 6 章 33) この世に命を与えるパンとは、イエスさま御自身の事でした。「わたしが命のパンである」(ヨハネ 6 章 35)。

イエスさまがこう言われたからです。わたしたちに、真の命を与えるために来られたイエスさま。この方を信じるのが、神の業を行なうということだとイエスさまは言われました(6章29)。ところが、人々はイエスさまの話を聞いて誤解をしてしまいました。あのイエスという人は、偽預言者ではないかと。このように、人々は何時にもイエスさまの言われた言葉を全てねじ曲げて聞いていたのです。イエスさまは、何の罪も犯していないのに十字架に掛けられてしまいました。これは、二千年前の人間だけの事ではありません。全ての時代の人間が、神の遣わしたイエス・キリストを憎みました。この方は何も悪いことはしていないのに。全人類が、この方の敵となって十字架に付けて殺したのです。闇に覆われたこの世が神の光を消そうとして、罪のない方を殺しました。この世は、イエス・キリストを理解しないのです。

しかし、たとえ世のわたしたちがイエスさまを十字架の上で殺しても神の光を消すことはできません。神様が、この光を消させなかったからです。神は、三日目にイエス・キリストを死者の中から引き上げられました。復活なされたイエスによって弟子たちは、真実が解りました。イエスさまが、神のところから来られたメシアであると理解できたのです。イエスさまによって、目を開かれたからです。たとえこれから、この世の暗黒が更に暗く深くなろうとも。イエス・キリストの光は、誰も消すことできないのです。御言の光は、今も世を照らしています。「そして闇は光に勝たなかった」(口語訳)。永遠に勝つのは光です。主イエスが再び世に来られる時それは更にはっきりとするでしょう。神の言イエス・キリストこそが闇に打ち勝つ「光」です。わたしたちは、今から後も光であるイエス・キリストに聞き従って行きましょう。

[説教者：堀地敦子牧師]